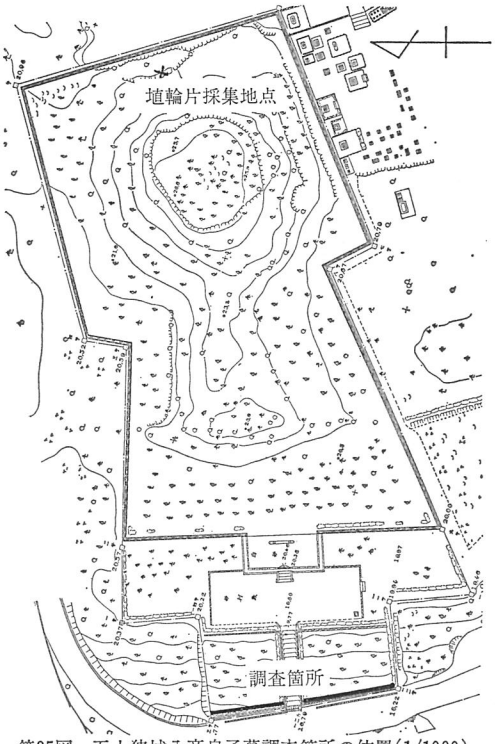
五十狭入彦皇子墓擬木柵設置工事箇所の立会調査

景行天皇皇子五十狭城入彦皇子墓は、愛知県岡崎市西本郷町和志山に所在する。墓は、現在全長五五メートルほどを測る前方後円墳であり、和志山古墳群の中核をなす（第35図）。

今回、墓前を通る市道との境界に擬木柵が設置されることとなり、その掘削工事に立ち会った。

掘削箇所は擬木柵の支柱が設置される部分のみであり、拝所に向かって右側に九箇所、左側に六箇所の合計一五箇所を、約一・五メートルおきに掘削した。各掘削箇所は縦六〇センチ、横七〇センチ、深さ六〇センチほどを測る。

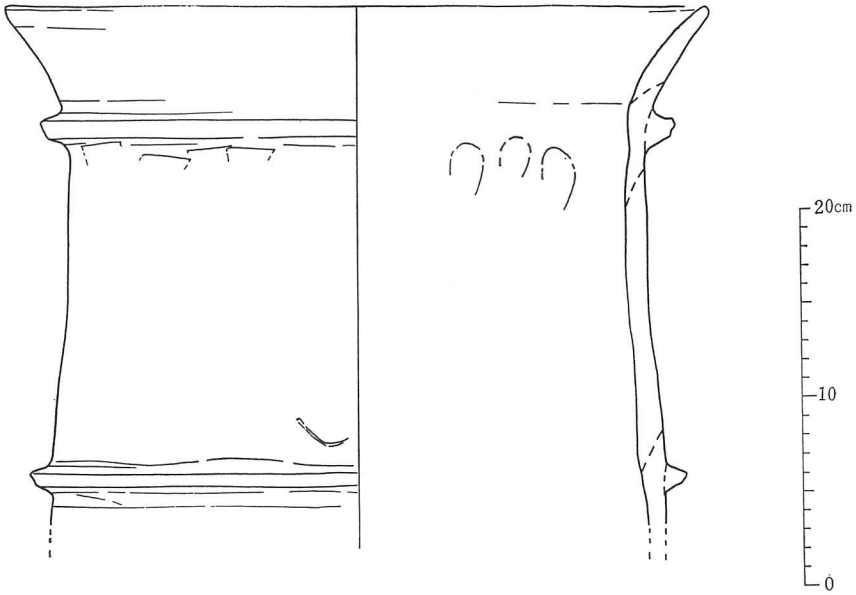


第35図　五十狭城入彦皇子墓調査箇所の位置(1/1000)

掘削した箇所の土層断面を観察したところ、各掘削箇所とも現地表面から二〇センチほどは、腐植土の堆積した表土であり、木根等を含む土層である。その下に黄褐色砂質土が四〇センチほど堆積していた。この土はそれほど締まりもなく、後世の盛土と判断した。この盛土は道路面と拝所との比高差三メートルほどを測る斜面を整備した際のものと思われる。ほとんどの掘削箇所はこの盛土層内で掘削が予定深度に達した。しかしながらわずかに暗灰色砂質土が観察される所もあった。この土は均質な土壌を呈し、地山の可能性が考慮される。ただ、掘削面積が僅少なため、広がりなどは不明である。

以上の掘削箇所からは、遺構、遺物は全く検出されず、工事は予定通り施工した。

さて、墓は前方後円墳とされるが、第35図に示したように後円部、前方部ともに本来の形状を若干失っているものと思われる。これは隣接する蓮華寺の建物が墳頂部に存在していたためと考えられる。江戸年間には経堂があったと伝えられる。また、明治二〇年代には薬師堂と石塔があったという記録が残されている。このことを裏付けるように、現在でも後円部の墳頂付近には瓦片が散乱した状況が認められる。前方部も現状ではかなり削平された様子が窺える。ここにも何らかの建物が存在した可能性がある。



第36図　五十狭城入彦皇子墓の出土品(1/4)

なお、墳塋部巡回中に第36図に示した埴輪片を採集した。採集した地点は第35図に示したが、界標六号から北へ一二メートルほど行ったところの、蓮華寺に面する後円部背後の墳塋斜面である。この部分が、根起きのためかわずかに表土が凹んだところに露出していた。採集した埴輪は表面がそれほど摩耗していないことから、原位置に近い場所を保っている可能性もある。この埴輪が採集された地点と、地形図の等高線の状況を勘案すると、本来の墳塋はもう少し大きかった可能性が高い。特に蓮華寺と接する後円部東側、及び墓地と接する後円部南側は、現在でも急傾斜をなしており、本来の墳塋が削られている可能性が高い。

さて、採集した埴輪は復元口径三七・二センチを測り、現存長二八センチほどが残る。第36図に示したように口縁端部から五センチほどの所にめぐる突帯から上部は外反する。器厚はおよそ一センチ前後である。突帯の間隔は最も突出した部位で計測したところ一八・七センチを測る。調整については内外面ともに刷毛目は観察できない。口縁部外面は横方向のナデ調整の痕跡を残す。胴部外面については板ナデ調整、もしくは指ナデ調整が施されているものと思われる。内面については縦、及び斜め方向の指ナデ調整が施されている。器壁外面にはわずかに赤彩が認められ、ベンガラによるものかと思われる。現状で残る部分すべてに赤彩が認められ、突帯の下側にも認められることから、焼成後に塗布したものであろう。なお、透かし孔の位置、形状については不明である。

さて、本個体に最も類似した資料を近くに探したところ、矢作川左岸

西阿知和町於新造古墳出土品がある。(1) 本古墳は標高五〇メートルほどの丘陵上に造られた全長四二メートルほどの帆立貝式前方後円墳である。出土した埴輪の復元径は、五十狭城入彦皇子墓出土品とほぼ等しく、巴形の透かし孔が認められる。また、同市六供町所在の愛宕山と呼ばれる丘陵上にある甲山一号墳（直径六〇メートルほどの円墳と推定される）出土の埴輪にも近似する。

採集した埴輪が少数であるため、本墓の埴輪の全体像については不明な点もあるが、これまでに知られている埴輪が少ないことから、良好な資料であると思われる。

なお、今回の調査にあたっては、岡崎市教育委員会から多くのご協力、ご教示を賜った。記して感謝申し上げるものである。

註

(1)『新編　岡崎市史』史料　考古　下　一九八八

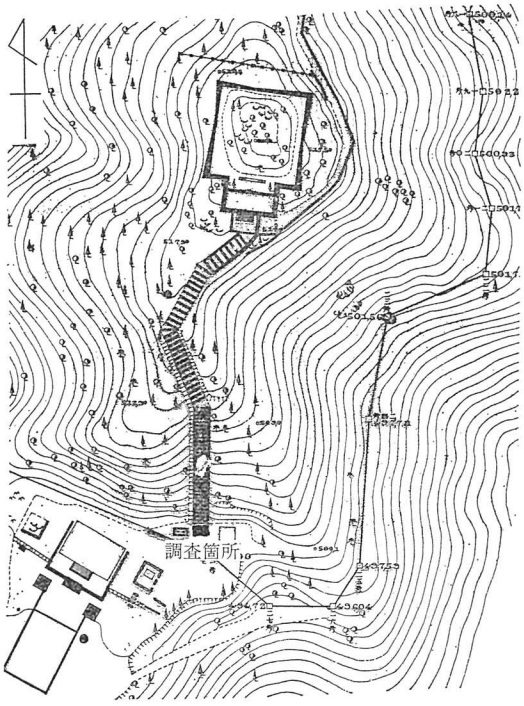
（徳田誠志）

大碓命墓石段改修工事箇所の立会調査

景行天皇皇子大碓命墓は愛知県豊田市猿投町鷲取に位置する。墓は猿投山の山頂近くにあり（標高五二〇メートル前後）、猿投神社西の宮に接して営まれている（第37図）。

この西の宮から墓へ至る階段は六〇段近くを数える急峻なものであり標高差にして二〇メートル近くを登ることになる。この階段が経年のため表面が摩耗し、昇降の際危険を生じることになったことから、改修工事が計画された。この工事に伴って、遺構、遺物の有無を確認するための立会調査を平成九年二月十二日から三日間実施した。墓の墳塁部からはかなり距離があるものの、先述した猿投神社西の宮が隣接し、この神社の境内地にあたることから、神社に関する遺構、遺物の出土も予想された。

調査は階段の最下段にあたる位置に（西の宮社殿が建つ高さ）、二メートル×一メートルの調査トレンチを設け、深さ約一メートルを掘削し



第37図　大碓命墓の調査箇所(1/1000)

五十狭城入彦皇子墓の出土品

狭城盾列池後陵の出土品